課題2レポート

芦田聖太

提出日 17/07/06

Ex3.2

Ex3.2.1

設計方針

main.ml で定義されている、大域変数の部分にローマ数字を追加する。

実装

設計方針で述べたように、main.ml の大域変数に $i\sim v$ を初期値として定めた。以下に実際に実装したコード掲載しておく。

```
let initial_env =
Environment.extend "iv" (IntV 4)
  (Environment.extend "ii" (IntV 3)
      (Environment.extend "i" (IntV 2)
      (Environment.extend "i" (IntV 1)
            (Environment.extend "v" (IntV 5)
            (Environment.extend "x" (IntV 10) Environment.empty)))))
```

Environment の extend を使って、束縛変数と変数の情報を追加していった。変数を指定したので、実際に動きを確認する。 $i\sim v$ の数字を用いる演算を入力した。

実行結果

```
#iv + v * ii + i + iii;;
val - = 18
```

以上の結果より、大域変数が正常な値を示していることが確認できた。

Ex3.2.2

設計方針

main.ml の read_eval_print の部分で error をキャッチできるようにする。

実装説明

lexer、Parser、eval で発生するエラーを補足できるように以下で示す変更を行った。

Parser.toplevel Lexer.main (Lexing.from_channel stdin)

の部分で発生するエラーを let decl 以降の部分を try with で囲うことで補足 した。各エラーの原因は次のように対応している。

- Error は eval でのエラー
- Parser.Error は Parser でのエラー
- Failure は lexer でのエラー

各エラーの処理後、read_eval_print を再度行う。この処理を行うことで、エラーが起きても入力待ちの状態に戻すことができる。

Ex.3.2.3

設計方針

Syntax の Binop に And と Or を追加し、&&と||を認識させるために lexer にトークンとして "&&" と "||" を追加した。 さらに、Parser では And と Or の木を追加して、eval では And と Or の評価部分を追加した。

実装説明

まず、Syntax と lexer の変更点を説明する。

Syntax

```
type id = string
type binOp = Plus | Mult | Lt | And | Or
~~~~~~
```

lexer の main の部分

Syntax では、binOp に And と Or が追加されているのがわかる。また、lexer では、main に "&&" と "||" が追加されている。次に、Parser の変更点についてみる。

Parser 変更点の抜粋

```
%{
open Syntax
%token LPAREN RPAREN SEMISEMI
%token PLUS MULT LT
%token IF THEN ELSE TRUE FALSE
%token AND OR
toplevel :
   e=Expr SEMISEMI { Exp e }
Expr :
   e=IfExpr { e }
  | e=ORExpr { e }
ORExpr :
   l=ORExpr OR r=ANDExpr {BinOp (Or, 1, r)}
  | e=ANDExpr {e}
ANDExpr :
   1=ANDExpr AND r=LTExpr {BinOp (And, 1, r)}
  | e=LTExpr {e}
LTExpr :
```

```
l=PExpr LT r=PExpr { BinOp (Lt, 1, r) }
l e=PExpr { e }

PExpr :
   l=PExpr PLUS r=MExpr { BinOp (Plus, 1, r) }
l e=MExpr { e }
```

token に AND と OR が追加されている。また、ORExpr と ANDExpr と いう部分が追加されているのがわかる。これは、AND と OR の判定部分である。AND は OR よりも先に計算され、整数の大小評価は AND よりも先に計算されるものなので、ORExpr、ANDExpr、LTExpr という順番で定義してある。

最後に eval の変更点を確認する。 eval の変更点

```
~ ~ ~ ~ ~ ~ ~
let rec apply_prim op arg1 arg2 = match op, arg1, arg2 with
    Plus, IntV i1, IntV i2 -> IntV (i1 + i2)
  | Plus, _, _ -> err ("Bothuargumentsumustubeuinteger:u+")
| Mult, IntV i1, IntV i2 -> IntV (i1 * i2)
  | Mult, _, _ → err ("Both arguments must be integer: *")
  | Lt, IntV i1, IntV i2 \rightarrow BoolV (i1 < i2)
  | Lt, _, _ -> err ("Both_arguments_must_be_integer:_<") | And, BoolV i1, BoolV i2 -> BoolV (i1 && i2)
  | And, _, _ -> err ("Both_arguments_must_be_boolean: _&&")
  | Or, BoolV i1, BoolV i2 -> BoolV (i1 || i2)
  | Or, _, _ -> err ("Both_{\sqcup}arguments_{\sqcup}must_{\sqcup}be_{\sqcup}boolean:_{\sqcup}||")
let rec eval_exp env = function
  | BinOp (op, exp1, exp2) ->
let arg1 = eval_exp env exp1 in
     (match op with
         And -> (match arg1 with
                          BoolV false -> BoolV false
                        | _ -> let arg2 = eval_exp env exp2 in
                            apply_prim op arg1 arg2)
       \mid Or -> (match arg1 with
                          BoolV true -> BoolV true
                        | _ -> let arg2 = eval_exp env exp2 in
                             apply_prim op arg1 arg2)
       | _ -> let arg2 = eval_exp env exp2 in apply_prim op arg1
            arg2)
```

変更しているのは apply_prim の部分である。AND と OR はそれぞれ、2 つの Bool V に対して、AND と OR の計算を行っている。また、BinOp の部分で exp2 の値に関係なく true になる場合と false になる場合の対処を行なっている。

以上の変更を行うことで、AND と OR 演算を実現した。

Ex.3.2.4

設計方針

コメントを無視できるように、lexer の main に変更を加える。さらに入れ 子のコメントにも対応できるように新たなルールを追加する。

実装説明

lexer.mll の変更部分

まず、main の部分では (*の入力に対して、comment lexbuf というアクションを行ったあと、main lexbuf を行うようにしてある。comment lexbuf 起こすことで、新しく追加したルール comment を適用し操作完了後、main lexbufでルール main に戻るようになっている。ルール comment の内容は以下のようなものである。

- "(*" と "*)" 以外の入力に対して、トークンを返さずルール comment に戻る。
- "(*"の入力に対して、ルール comment を行い、終了後もう一度ルール comment を行う。
- "*)" の入力に対して、何も返さない。

3つ目のルールでルール適用が完了すると、呼び出し元の comment lexbuf が完了し次のアクションを行う。一番外側のコメントであれば次のアクションは main lexbuf となり、コメントが閉じられて再びプログラムを読み込むようになる。入れ子となっているコメントであれば、次のアクションは commnet lexbuf となり依然としてコメントのルールが適用されることとなる。

Ex3.3

Ex3.3.1

設計方針

以下に変更を加えるプログラムと変更について記す。

- syntax.ml の exp に Letexp、program に Decl をそれぞれ追加。
- lexer.mll の reservedWords に let と in を追加。 さらに main にも "=" を token として追加。
- Parser.mly は token,toplevel,Expr に変更を加え、LetExpr を追加。
- eval には let 宣言の評価部分と let 式の評価部分を加える。

これらの変更によって、let 宣言と let 式を実現する。詳しい動作の説明は実 装説明で行う。

実装説明

まず、Syntaxの変更について見てみる。追加とコメントが入れられている 部分が追加部分となる。syntax.ml

```
type exp =
   Var of id
   ILit of int
   BLit of bool
   BinOp of binOp * exp * exp
   IfExp of exp * exp * exp
   Letexp of id * exp * exp (* 追加 *)

type program =
   Exp of exp
   Decl of id * exp (*追加*)
```

Letexp は id と 2 つの exp を保持する。id は束縛したい変数、1 つ目の exp が id に束縛したい式で、2 つ目の exp はデータが束縛された id を用いて評価 したい式となる。

Decl は id と exp を保持する。id が束縛したい変数で exp が束縛したい式となる。

2つ目は lexer の変更点について確認する。

```
let reservedWords = [
    (* Keywords *)
.......
    ("in", Parser.IN);
    ("let", Parser.LET)
]
}
rule main = parse
    (* ignore spacing and newline characters *)
...........
| "=" { Parser.EQ }
.........
```

Keyword として in と let を追加し、rule main に=を追加。この処理を行うことで let を token LET、in を token IN、=を token EQ として出力するようになる。

3つ目に Parser.mly の変更点について確認する。

Parser.mly

toplevel,Expr にそれぞれ変更を加え。LetExpr を追加。

toplevel の変更により let 宣言の構文木が、LetExpr を追加することで let 式の構文木がそれぞれ認識可能となる。返す値はそれぞれ、let 宣言は Decl、let 式は Exp LetExp となる。

最後に、eval.ml についての変更点を確認する。eval.ml

```
let rec eval_exp env = function
...........
| Letexp (id, exp1, exp2) ->
    let value = eval_exp env exp1 in
        eval_exp (Environment.extend id value env) exp2

let eval_decl env = function
    Exp e -> let v = eval_exp env e in ("-", env, v, Nothing)
| Decl (id, e) ->
    let v = eval_exp env e in (id, Environment.extend id v
        env, v, Nothing)
```

Letexp では、eval_env exp1 で exp1 を評価し、value に束縛。id と value の 関係を environment に追加した環境で exp2 を評価する。eval_decl では Decl(id, e) の場合の操作を追加する。e を評価し、id と e の評価値の関係を環境に追加。id と新たな環境、e の評価値の組を返す。Nothing は Ex3.3.2 のための拡張なので、今は説明しない。

Ex3.3.2

設計方針

- syntax.mlの program に DeclDecl と Nothing を追加。
- Parser.mly は toplevel への追加と LetLetExpr を追加する。
- eval.ml には eval_Decl の部分に DeclDecl の評価を追加。
- main.ml には read_eval_print に DeclDecl の処理を追加する。

実装説明

syntax.ml

```
type program =
    Exp of exp
    | Decl of id * exp
    | DeclDecl of id * exp * program
    | Nothing
```

DeclDecl はidと expと program を保持する。idに expを束縛する。program は次以降の let 宣言の情報が含まれている program である。Nothing は評価の時に必要となる。最右端の Let 宣言は、最 DeclDecl の program の部分にNothing が格納される。

Parser.mly

```
toplevel :
    e=Expr SEMISEMI { Exp e }
    | LET x = ID EQ e = Expr SEMISEMI { Decl (x, e) }
    | LET x = ID EQ e1 = Expr e2 = LetLetExpr SEMISEMI { DeclDecl (x, e1, e2) }

LetLetExpr :
    LET x = ID EQ e = Expr { Decl (x, e) }
    | LET x = ID EQ e1 = Expr e2 = LetLetExpr { DeclDecl (x, e1, e2) }
```

連続する let 宣言に対応するために、toplevel に 3 つ目の式を追加した。e2 は LetLetExpr になり、program を返すようにしてある。LetLetExpr では、2 つの式が定義されている。1 つ目の式は連なる let 宣言の最右端の let 宣言を把握するようになっており、2 つ目の式は 3 つ以上 Let 宣言が連なる時の間の Let 宣言を把握するようになっている。

eval.ml

返り値を 4 種類のデータの組に変えた。これは let 宣言が続いた場合、DeclDecl の e2 を取り出すために必要であったからである。取り出した e2 に関する処理は main の変更で詳しく触れる。したがって、4 つ目のデータは DeclDecl 以外の program には関係ないので Nothing としておく。DeclDecl の場合は e1 を評価して、id と評価値を拡張した新しい環境、評価値、そして e2 にある program を返す。

main.ml

```
match expr with
            Nothing -> Printf.printf "val_{\sqcup}%s_{\sqcup}=_{\sqcup}" id;
                         pp_val v;
                         print_newline(); read_eval_print newenv
          | Decl( x, e ) -> if checker id expr
                               then
                               repeat newenv expr
                               else
                               Printf.printf "val_{\sqcup}%s_{\sqcup}=_{\sqcup}" id; pp_val
                               print_newline();
                               repeat newenv expr
          | DeclDecl( x, e1, e2 ) -> if checker id expr
                                         then
                                         repeat newenv expr
                                         else
                                         Printf.printf "val_{\sqcup}%s_{\sqcup}=_{\sqcup}" id
                                              ; pp_val v;
                                         print_newline();
                                         repeat newenv expr
in repeat env decl
```

repeat は環境と program を引数にとる。program が Exp か単体の let 宣言、もしくは連続する let 宣言の最右端の場合 expr が Nothing になる。その場合は今までの処理と同じ処理を行う。連続する let 宣言の途中の部分がくるとき expr は Decl もしくは DeclDecl となる。その時は、新しい環境と expr を引数にして、repeat を行う。このようにすることで、連続する let 宣言を次々に評価していくことが可能となった。連なった let 宣言の途中で、同じ変数を何度も束縛する際に最後の束縛のみを表記するために、checker を定義した。checker では、DeclDecl に含まれている program を再帰的に調べていき、同じ変数を発見すると true を返す。checker が true のときは関数の束縛を表示しない。

Ex3.4

Ex3.4.1

設計方針

- syntax.ml の exp に関数の定義部分と 関数適用の部分を追加する。
- Parser.mly も同様に関数の定義部分と 関数適用の部分を追加する。また、fun と矢印を定義する。
- lexer.mll は fun と矢印を定義する。
- eval.ml には exval に関数のデータ型を追加。また、eval_exp に関数の 定義の処理と関数適用の処理を追加。

実装

syntax.ml

```
type exp =
.....
| FunExp of id * exp
| AppExp of exp * exp
```

syntax の exp に関数 FunExp と関数適用 AppExp を追加。FunExp は引数と 関数 exp を保持する。また、AppExp は関数 exp と適用される exp を保持す る。

Parser.mly

```
Expr :
   e=IfExpr { e }
  | e=LetExpr { e }
  | e=LTExpr { e }
  | e=FunExpr { e }
. . . . . . . . . . .
\texttt{MExpr}:
    e1=MExpr MULT e2=AExpr { BinOp (Mult, e1, e2) }
  | e=AppExpr { e }
 AppExpr :
    e1=AppExpr e2=AExpr { AppExp (e1, e2) }
  | e=AExpr { e }
AExpr :
   i=INTV { ILit i }
  | TRUE { BLit true }
| FALSE { BLit false }
  | i=ID { Var i }
  | LPAREN e=Expr RPAREN { e }
. . . . . . . . .
FunExpr :
    FUN x = ID RARROW e = Expr { FunExp (x, e) }
```

Expr に FunExpr を追加。ME の下で AE の上に AppExpr を配置する。関数は Let 宣言や他の計算式と同レベルに配置される。また、関数適用は整数、変数や Bool 値などの値の次に計算される。

lexer.mll

```
let reservedWords = [
    .....
  ("fun", Parser.FUN)
```

reservedWords に "=" を追加。main に矢印マークを追加。以上の追加によって Parser が=と矢印をマッチングできるようになる。

eval.ml

exval で ProcV という関数のためのデータを定義。ProcV は引数と関数の内容、そして関数定義のための変数情報を含んだ環境を保持する。評価する Expr が FunExp だったとき、id と exp、さらに環境を組にして ProcV を返す。また、関数適用のときは、まず exp1 が関数かどうかをチェックする。関数であれば exp2 の評価結果を引数に束縛し環境を拡張し。新たな環境で、関数の内容を評価する。

テスト

高階関数を定義できるかを確認する。以下は確認した結果である。

```
# let f = fun x -> x + 1;;
val f = function
# let c = fun g -> g 4;;
val c = function
# c f;;
val - = 5
```

c は引数に関数をとることができている。したがって高階関数が定義できることが確認できた。

Ex3.5

Ex3.5.1

設計方針

- syntax.ml の exp に LetRecExp を追加。 さらに program に RecDecl も 追加する。
- lexer.mll の reservedWords に rec を追加。
- parser.mly の toplevel に let rec 宣言を追加。Expr に let rec 式を追加。
 さらに tokenREC を追加。
- eval.ml ∅

実装

syntax.ml

```
type exp =
......
| LetRecExp of id * id * exp * exp (*追加*)

type program =
......
| RecDecl of id * id * exp (*追加*)
```

exp に LetRexExp、program に RecDecl をそれぞれ追加。RecDecl は let rec 宣言のときに必要なもので、束縛される変数と引数、関数の本体を保持する。LetRecDecl は let rec 式のときに必要となる。変数と再帰の引数、さらに関数本体と最後の評価式を保持する。

lexer.mll

```
let reservedWords = [
    .....
    ("rec", Parser.REC);
]
```

reservedWords に rec を追加する。追加によって Parser が rec をマッチング できるようになる。

parser.mly

```
%token REC collected :
```

token に REC を追加。toplevel に let rec 宣言を追加。返り値は RecDecl とする。Expr に LetRecExpr を追加。返り値は LetRecExp とする。保持する値は syntax の部分で表記した通りである。

eval.ml

eval_exp に LetRecExp の評価を追加する。ダミー環境への参照を作り、その参照を含めた新たな環境を構築し、最後に参照を新たな環境に付け替える。 RecDecl に関する評価も付け加える。方法は LetRecExp と同じ。

テスト

fact を実行した。

```
# let rec fact = fun n -> if n = 0 then 1 else n * fact (n - 1)
   ;;
val fact = <fun>
# fact 5;;
val - = 120
```

以上より正常に動いていることがわかった。

感想

全体として難しい印象を感じた。comment の課題と let をいくつも定義する部分ではかなり苦戦した。それ以外の部分では、ほとんどテキストを読めば理解ができた。ただ、Parser と lexer の構文を理解するのに少し時間がかかった。任意課題は余力があれば取り組みたい。